

暮にけり送り迎へし春秋の三十のとしもけふのみにして
一、立春の歌と詩

三年丙寅立春の心を

いづる日もけふ新玉の光とやさやかに見えて春は來に鬼
いかにして行末速きむさし野を一夜に春の立わたりけん

曉立春

天の戸をあくるもまたで曉の鐘の音かすむ春や來ぬらん

山家立春

柴門人少逢春開。歎息年光去又來。黃鳥凌寒今欲囀。雪消
山路自看梅。

一、室直清と贈答の詩歌

看丹直清今茲元旦詩云。

親闈在邇奈人遠。惆悵問安依早梅。以其大夫人在水戸邸
未得侍奉也。予深感其情。且寄以梅花一枝愚詠一首。

たらちめの安きをとへと咲梅の匂ひを風に送りこそすれ

直清謝以詩歌三首

一枝何處梅。龍贈草堂來。清香復寒色。春意共花開。

又もこむ春をしらせよたらちめの千とせをちぎる梅の初花

たらちめの安きを誰かしらすべき君が心の花ならずして
一、殿閣の落成を看て

さきくさのみつ葉四つ葉の殿造松諸共に千代を経ぬべし
さかえます梅さく門の殿づくり松も千とせの色を深めて

一、直清・泰順と贈答の詩歌

丹直清・坂井泰順來訪す。壁間に梅花を設く。泰順詩
云。

截去梅花生意新。主人心匠助天真。壁間更有孤山興。添得
清淡滿座春。

某和之

咲梅の色香やあだになりなまし春てふ宿も君しとはすば

直清和眞夫韻云

鄂歌一曲最清新。青眼相逢各自眞。賓主風流何所似。梅花席
上數枝春。

某和之

香をとめてとはぬ夕の春ならば梅さく宿も淋しからまし
源惟明夜に入來る。藤昌興の旅寓にて題梅花

うつしみる龜の深山の花の色に哀れつくしに匂ふ梅が枝

某返歌

うつしよみ龜の太山の春のいろを梅さかりなる池の汀に

不佞幸陪藤昌興之亭。漫賦一絶以賞主人之風。藤昌興

兄以和歌酬之。丹直清以佳絶和之。不堪感謝。再和

本韵以呈。

源 眞 夫

文遊乘燭二難新。句々揮毫莫不眞。誰知梅蕊無限興。都成
和漢一般春。

再和眞夫韻

丹 直 清

半夜清談玉露新。燈前話舊故情眞。寒梅藻詠競幽興。正是
風流一種春。

一、直清來訪唱和の詩歌

二月十五夜直清來訪呈一絶

春月無心入夜扉。舊遊□我信音稀。唯聽寂々松風響。獨促
幽情轉沾衣。

ひとりのみきけば中々佗しけれむかしながらの軒の松風
直清和之

閑夜月明獨掩扉。名流當代似君稀。待乘間暇重相訪。應
使松風滿客衣。

又も見む春をはかなみおもふかな草の枕の夜半の月かけ

一、湯島聖廟へ奉納和歌

廿五日湯島の聖廟へ和歌一首奉之 昌 興

神垣の梅のほひし深ければまつの嵐もかをるはるかな

一、九州の前田村

菅家左遷の時の太宰府は何れの國に候や、且神后宮三韓征
伐の時、異狄の耳を斬て、筑紫にて斬耳堂と號し塚ありと
云。是前田の邊の由也。當家御名字は此所たるべし。是又
何國に候哉可考の由、小瀬助信・室直清等に命ぜらる。

一、竹田平四郎より應答の箇條

竹田平四郎へ品々御尋の内、能初の使、昔は幕の内へ入申
躰に候。近代橋懸にて勤候。此儀は何頃より如此に候や。

此儀は當金春八郎九代前金春七郎東山殿時代は迄は諸大夫に候
故、能初の使幕内へ迄入候處、其後無位無官に罷成る故、

橋懸迄の由言上す。諸大夫は何代計り繼候や、秦の川勝は
正二位左大臣、夫より右七郎が三代計り前迄は高官に御座

候旨。凡川勝より當八郎迄四十九代相續のよし、昔よりの
系圖八郎方に傳來候やと被仰出候の處、古以來の系圖は應